

シリーズ

秘蔵写真

# 今は昔の林業

第16回

中部森林管理局技術普及課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

## 「枝打ち」



昭和四十年代頃のはしごを使った枝打ち風景  
(旧名古屋営林局管内)

樹木の枝を切る「枝打ち」の大きな目的は節が少なく真っ直ぐな木材を生産することです。枝打ちはある程度の太さがあり木材としての価値が高い部分、根元から高さ八メートルまでの間で行うことが多いものです。刃物で枝を切るといふシンプルな作業ですが、人の背丈よりも高い所の枝を扱うものだから、



昭和四十年代頃の木に登りながらの枝打ち風景  
(旧長野営林局管内)

やり方、使う道具には幾つもの種類がありました。

枝を切るための道具としては鉋、手鋸、小さい斧、あるいは枝切り用の鋏などが使われました。作業の際に木の幹を傷つけてしまつてはいけませんし、枝の部分を残し過ぎても残る節が大きくなつてしまいますから、業者の技術力・熟練が必要な仕事です。また、高い位置に登るために足にスパイクを付けたり、木製または金属製の各種はしごをかけたりました。さらには、とても長い柄の鎌

を使って枝を切るやり方や枝打ちロボットが検討されたこともありました。節が少ない木材は価値が高くなりますので、かつて枝打ちは熱心に取り組まれた作業だったのですが、その後、節の有無がそれほど重要視されなくなつていったこと、製材加工技術の進歩などから、国有林で枝打ちが行われる機会は少なくなつていきました。



様々な作業が同時に行われている枝打ち風景  
(旧名古屋営林局管内)

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。当サイトへは、QRコードを読み込んでください。

